

COSMOS集



斉藤 梢選

「あすなる集」特選

大気の匂ひ

浜野 昌子 北海道

初雪の積もりし朝のしめやかな大気の匂ひ冬来たりけり
冬枯れの人気なき道選びつつ一人愉しむ漫ろ歩きを
あと一年講師の職をと望みしが三月までと告げらるるなり
校内の待降節の飾りつけ今年ばかりの眺めなるとは
降りしきる雪飽きもせず眺むれば雪に洗はれ思ひ鎮まる

夜の底

成田 裕子 * 青森

白鳥の列がほどけて消えてゆく私の思い届かない冬
オリオンを一人見上げる夜の底さみしさだけが横に立っている
手袋が片方なくて心まで半分冷えて夜の街行く
街頭のやわらかき光一人立つわたしの影をやわらかく伸ばす

薄雪の静けさだけが積もってく名前のないまま続いた孤独

二季 榛原 みよ子 * 埼玉

江戸の粹笠仙の本捨て難しひらはらめくり元に収める

香ばしい甘辛醬油の絡みつくバームクーヘン素通りできず
熊のこと無ければ行きたい紅葉狩り出し巻卵に塩むすび持ち
不安なくざわざわしないあの項は優しかったねアルバムを繰る
春と秋やがて無くなる二季になる丸いせんべいパッチンと割る

個体差 内山 春美 * 千葉

法師蟬の気忙しき声に思い出すべそをかきつつ描きし絵日記
カラカラと紙コップころぶ路地裏に祭りの後の風のつめたさ
ファンファーレ奏でるように咲き揃うスポーツの日のアペリアの花
黄葉といまだ青葉のいちよう並木 ふたごの姪を墓参にさそう
双生児の姪に個体差感じつつ黄に青まじるいちよう道ゆく

夫の写真 木村 マサ子 神奈川

テレビ点け夫の写真を立て掛けて大好きだった大相撲見る
十年で遺骨は土に還るとふあなたが逝きて五年半過ぐ
六年間夫君の介護に励みしとふ友の歌集を心して読む
入居者われ施設の花壇を任されて「花咲ばあさん」いい気分なり
越して来て二年半余も過ぎたるに気持は茨城のふるさと恋し

鈴木 竹志選

思ひ出の笠智衆

富 永 弘 東京

中学の先輩なれば笠智衆の生家訪ねき戦ひの日に
十キロを歩みて中学に通ひたりグラマン来れば土手にかくれて
飄々としたる写真の笠智衆見つつ和らぐ午後の電車に
飴玉をポケットに入れ大江戸線一周りする老いの気晴らし
歳晩の図書館に来て「白き山」さがす茂吉の歌読みたくて

引越し前後

宮 梓 一*東京

誰がために俺は残業してるのか今日も会えねどわかつてはいる
あれも捨てこれも放つてみたはずが引つ越し準備まだ終わらない
一歳はすでに自宅がわかるらし旧居の前を通るたび泣く
結露した職場の窓へ線を引く蛮勇は誰 指がつめたい
村上はホワイトソックス入りとなる僕のタンズにずっと無い色

伊太利亜軒

佐 藤 多佳子 新潟

口もとに笑みを浮かべて歩みゆく古町芸妓は伊太利亜軒へと
正面の大階段は知つてゐるわが若き日の夜会の想ひ出
百年前ベレーの祖父は撞球せり伊太利亜軒なる木の館にて
キューをもて突かれし玉の散乱のはじける音や人のざわめき
料亭の松の緑は黒堀にこんこんと湧く清水のごとく

語学検定

星 野 尚 子*新潟

大丈夫 あなたのカレーが辛くってほんのちよっぴりヒリッてしただけ
ぼつたりとはっこりがなじむ食卓にチーズフォンデュで祝うクリスマス
おだやかにたおやかに生きたいだけなのに理想の自分がいつも邪魔する
どんな負け戦でもいく足輕の気持ちで臨む語学検定
合否判定もスワイプスワイプで見つけたふたもじ合格の文字

どぢです

四 谷 範 富山

姪つ子の作りくれたる里芋と銀杏のご飯ほくほく旨し
プランターの間引き終へたる大根よゆつくり太れと追肥をしたり
どぢですぬ指まで切りぬ包丁を研ぎてもらひしことすつかり忘れて
何日もかけて編みたるセーターが気になり解けばああ三十分で
幾つかの手袋嵌めてみたけれど買はずに出たり師走のデパート
水上 比呂美選

火は弱すぎる

小 田 沙也加*愛知

トラディショナル・ショート・ボムと言いながら留学生に見せる十二首
この歌は虚構であつて事実だと伝えるための火は弱すぎる
十二首のどれもが鏡ほんとうのわたしを風下には置かないで
三つ編みをほどけばわたしはほどかれて何者でもない姿で眠る
眠れない夜は抱き枕をあやすわたしがわたしを育てるために

九 十 六 歳

梅 本 麻 子 三 重

生かされて今年も渋柿むいて居りおいしいおいしい干し柿になあれ
祖父母父母妹と姉弟まで去りゆきしこの世に生かされて在り
水色の果てなき空よ遠山の稜線くきやか秋は来にけり

無惨なる裸体目に入る入浴時致し方なし九十六歳

世はうつり口飲み立ち喰ひ歩き食べ昔の不作法ふつうとなりて

いざ飛べ宙へ

原 田 登 美 兵 庫

表紙絵も扉の写真も色刷りの「コスモス」めくる朝のとときめき
三分で止まつてしまつたタイマーに茹でる卵の身の果て案ず
「プラタモリ」の函館編になつかしむ宝来町にありし祖母の家
一歳の悪戯好きの写真の目おとなになりても同じ目の孫
コラスに「鉄腕アトム」の二重唱をどるころよいざ飛べ宙へ

アルデバラン

芝 崎 千 鶴 * 和歌山

「老けた手」と夫言うけれど我的手は炊事洗濯すべてこなす手
里にまだ見かけぬメジロを夫は待ち蜜柑刺しおり庭の小枝に
船が着きにわかには港は活気づく魚を売るのは浜の母ちゃん
水揚げ後すぐの魚を購いぬ雑賀崎漁港にぎわいており
星の名と知りたり歌の題名のアルデバランとベテルギウスは

あらたまの年

日 野 幸 吉 * 広島

年ごとに吉兆^{きつちょうはん}幡立て練り歩くあらたまの年を祝ぐ大社町

番内の荒ぶるさまにおののきて声を限りに子ら泣き叫ぶ

透きとおる冬日の空に吸われゆき影さえ薄くこの身おぼろなり
あまりにも世界ちがえど達郎の妻なるまりやも出雲の生まれ
聞こえくる(雨は夜ふけ過ぎに…)の歌 祝えぬ夜の青春遙か
鈴木 千登世選

機械のしもべ

井 上 喜美子 * 山口

陽の照ればなるべく戸外の庭仕事 小春日和に芽吹く草あり
スパーも合理化なるか何もかも自分で出来ねば買物ならず
メッセージ通りに精算せよという機械のしもべとなりて見つむる
終活に高価な絨毯買う矛盾 仏壇前に敷きて落ちつく
亡き夫の名前を吾に書き替えてユニセフ募金の振込みをする

事件です

落 合 美代子 香川

夢ならば醒めずそのまま見させてよ幸せですかあの世のかあさん
事件です、家にのらねこ迷ひこみ夫のふとんで添ひ寝してをり
とりあへず美人ぢやないが一人のための癒しの人になりたい
とつぜんに従妹の死亡を知らされて無明の闇につきおとされぬ
待合の電光板をチラ見してなかなか来ない順番を待つ

笑 顔 で

猿 渡 紀美子 福岡

応援の沿道を雪がちらちらと降りだす中学駅伝大会
機関車のごとく白き息吐きながら駆けゆく華奢な中一のランナー

仰向けに見上げる公孫樹と青空がまなこに優しい秋の露天湯
寒風に張りつめた空気裂くやうに自転車で下る公孫樹並木を
心配をかけないやうに練習日は笑顔で顔出す怪我したわれも

鴨 居 の 夫 佐 藤 久 美 子 大 分

着ることもなきと思へど虫干しのきものに樟脳入れて仕舞ひぬ
近付けど慌てもせずに野良猫は目力にわれの動き窺ふ
刈取りを終へし田圃に藁塚を見掛けぬ峽のゆふやけこやけ
夫送り三十三年命日の墓前に親族の過ぎ来しを告ぐ



拭き掃除の脚立に上がるが危ふいか鴨居の夫がわたしをみてゐる

し の ち ゃ ん 永 松 たづ子*大 分

速吸瀬戸の海風あおる火の力焼きつくし止むや映像に恐る
佐賀関の友即スマホに出て言いぬ「火が匂うけどこは風上」
永遠に六十七歳の母を越し喜寿になりたり三十九年後
ちらばれる濃淡のしみ半数は左右对称喜寿の手の甲
越して来て初登校するしのちゃんを父母祖父弟門先に目守る

大 松 達 知 選

「その二集」特選

フアンファアレ 棟 方 貴 之*青 森

惑星間輸送機に積むリング箱 ペガへ進学した子を想う
いつまでもいつまでも虹 いつまでも家族でいられぬ娘をなでる
チヨコケーキチヨコケーキって歌ってる二歳のファンファアレのごとき声
このころは煙突のない家ばかり魔法でカギを開けるサンタさん
サンタ業代行サービス六年目ラッピングなど慣れたもんです

き よ う は 虹 く どう れ い ん*岩 手

待合室に植木のような老人がいて夕暮れをずっとそこにいた
偽物のしかし豊かな白ひげをつけてサンタの役を務める
おおきな鰐飼っているよう寝る前の加湿器にやかんで水を遣る
苦手な人を克服するほど暇でなく昼餉にあんこパイかぼちゃパイ
虹のかかるような疲れと雪を踏むような疲れがありきようは虹

葦 鶴 山 崎 杜 人*群 馬

オーボエを組み立ててゆく手に揺れる銀のひかりの音階を聴く

オーボエの内なる道に風吹けば外灯がチカチカと瞬く
湖と霧の境界 リードより離れてきみは息を継ぎたり
開口端反射の原理ききながら陸橋をのぼり月に近づく
オーボエを崩せば湖の冴えわたり、眠ろう一羽の葦鶴となり

雀の体重計

新 美 亜希子*神奈川

次々にふわりと重さ計つてる 雀の体重計はすすきね
あんなにも怖かったのにバカボンの世界でわたしれれのおじさん
人気者だったあなたとパーティーでやわらかな肩ぶつけ合つてる
くちびるをはさんだときの弾力とモツが似てたと後で気づいた
見えていたわたしの影と友だちが靴を残して消えてしまった

水晶体

吉 本 美 加*神奈川

こんにちは／住まいは神奈川／僕はゲイ 順に並べて挨拶おわる
「その他」欄増やしただけの配慮では「言いさす喉に影が差しおり
前髪を数ミリ単位で動かしてなるほどこれが初めての恋
まずは鼻、それから頬にちよんちよんと 母の指して子に塗るニベア
目を開けて もっと大きく目を開けて 水晶体に冬を吸わせて

大野 英子選

象牙海岸

武 井 恵 子 東京

いまはもう象牙海岸と呼ばれるコートジボワールより夫は帰りぬ
出張よりもどおりし夫の荷をとけば三つの大洋の波音のする

胡椒、奴隷、黄金、象牙、地図上にかつて記されし海岸のあり
真冬並みのあすは寒さになるらしい象牙のひびき身にあたたかし
この家に犬、猫、鳥の気配なくいぬ、ねこ、とりの絵本の多し

命やしなふ土壤

谷 口 菜 月 東京

流水の割れ目のごとき碧き線が妊娠検査薬に浮かびぬ
棒一本ほんまに信じてええんかと検査薬見る学者の夫は
むらさきの芙蓉が空にひらく朝お腹の子との暮らしはじまる
舞ひあがる砂塵のをさまりゆくやうに親になること受け止めてゆく
胎芽といふ言葉を知りてわが体は命やしなふ土壤とならむ

デコポンの香り

松 本 遊*東京

弟が送ってくれたデコポンの箱を開ければ黄色あたたか
熊本の肥後もつこすのがんこ者このデコボンもわが弟も
デコポンの香りをかげばふるさとのみかんの山に抱かれている
デコポンのデコがボンしてふるさとに帰りたくなる霜月の暮れ
水餃子湯に浮きあがりくる皮の艶うるわしく冬がはじまる

八入の雨

米 沢 光 人*長野

白萩の花に冷たき雨が降る継ぎ接ぎだらけのわが生に降る
秋の日の八入の雨を身に集め白菜結び山は赤らむ
レアアース掘り尽しなばデジタルのなき世とならん二十五世紀
国民の熱狂ありて誤まりしあの戦前にこの風は似て
親しきが逝くたびわが身は削られて軽きししむら秋風に揺る

白 き 光 椋 本 信 枝 静岡

一戸に一人 吉 村 啓 子*福岡

天空の茶園のまなかのティーテラス煎茶ふめば小春日の風
叫ぶごと風に散るなり寒牡丹六十八歳弟の逝く
奥つ城はいつのまにやら住宅街真正面にまほらまの富士
字余りのやうに一輪かへり花納骨式にあかりをともし
十二月がきてしまつたよ朔日の白き光に干す羽ぶとん

水上 芙季選

予 算 要 求 江 越 国 弘 長 崎

閑 架 図 書 庫 八 木 かおり 奈良

裏起毛のズボンの裾を縫ひをればわたしの膝がひだまりとなる
母住まふ家の小庭の楓いま葉うらまで染め渾身の紅
巻貝の奥へいざなはれるやうに閑架図書館の階段をゆく
庭木にも冬支度させ角の家ロープライトの灯りあたたか
三日月が身の半分を山の端に沈めて照らす暗峠くらがりたうげ

澄 み た る 空 稲 田 ひとみ 香 川

新 燃 岳 小 田 美恵子*宮 崎

声あげて泣く児の中に燃えるもののちのすべてそこにありなむ
金木犀香りは空へのぼりつつわたしも少し軽くなりゆく
名月に団子もススキもなければ澄みたる空に妣を思ひぬ
干し柿の朱の移ろひを待ちわびて冬の日差しが壁にゆらめく
絵手紙に柿を描きぬひらがなのやさしきこゑで読まれますやう

大雨に傷む校庭なほす申請せむと巻き尺長々伸ばす
校庭の傾斜直さむ予算申請叶はぬ夢でも図面を書けり
裏侵入しやすき校舎の防犯カメラの予算要求書くこれで三度目
一瞬に翼が目の端よぎるなり寝転び「レイテ戦記」読みある晩秋
ジョギングの汗かき巡る公園に膝枕するペアが居るなり
あざやかな黄色の時季は短かくて裸となりし公孫樹寒から
根を覆うあまたの落ち葉に守られてゆつくり休め春がくるまで
十五年前に噴火し今もなお噴煙あがる新燃岳よ
溶岩に埋まりしのちも忘れない火口湖水のエメラルド色
喜寿すぎて登ることもう叶わない韓国かうくに、新燃、高千穂の峰